

第13回優秀論文賞選考理由

優秀論文賞選考委員会 高橋伸夫

中ソ関係史の研究は、冷戦史の一部として、1990年代以降に利用可能となった中国、ロシア、および旧東欧諸国の文書館の所蔵資料を用いて多くの研究が積み重ねられてきた。だが、1950年代初めに生まれた中ソ同盟の基本的な性格をどうみるかについては、見解が分かれている。すなわち、ソ連がこの同盟をもってアジアにおける反米闘争の積極化を図ったとみる見解と、それとは逆に、ソ連がアジアにおける革命については関与を控え、その主導権を中国に委ねたとみる見解である。

本論文は、主として後者の説を検証するため、中華人民共和国成立直後に北京で開催された世界労働組合連盟（世界労連）アジア・オセアニア会議における議論を手掛かりに、中ソ分業体制の実態を解明しようと試みたものである。本論文は中国語とロシア語のアーカイブを利用して、同会議において中国代表が標榜した武装闘争路線が引き起こした波紋、世界労連アジア連絡局を北京に設置することへの中国の躊躇、そして1949年末までには同局が成立したものの、大きな役割を果たす前に有名無実化してしまう過程を明らかにしている。このような事実と経緯からみて、世界労連アジア連絡局は、1958年3月の解散までに、中ソ分業体制のある種の拠点として機能したものの、それをもって分業体制が成立していたとみなすことは難しいと筆者は結論付けている。

本論文は問題設定の大きさ、およびマルチ・アーカイブの手法を用いて手堅い実証が行われていることが高く評価された。議論の運びも無理がなく明快である点も、選考委員のほぼ一致して認めるところであった。ただし、ここで明らかにされた点は、当時の中ソ関係の一面面にすぎないものの、この限定された局面を全体に及ぶかのように解釈しているきらいがあると指摘が一部の選考委員から提起されたことを付記しておきたい。それにもかかわらず、大きな問題意識をもって中国語とロシア語の資料に取り組み、「新しい冷戦史」を書こうとする試みは高く評価できる。よって、選考委員会としては、優秀論文賞を授与するにふさわしい論文であると判断するものである。

受賞の言葉

宇都宮大学国際学部 松村 史紀

まさか拙い作品をアジア政経学会優秀論文賞という名誉ある賞に選出していただけたとは想像だにしておりませんでした。身に余る光栄に存じます。中ソ関係史の分科会ならびに雑誌特集号の企画に協力して下さった会員各位、とくに討論役を快諾して下さいました石井明先生、学会賞担当理事の高橋伸夫先生、選考委員の先生方にまずは厚く御礼申し上げます。

晴れ舞台が不慣れな身にとって、ふさわしい言葉を見つけるだけで一苦労、拙稿の背景は雑誌特集号の「序言」に譲ることとして、ここでは日頃の思いを正直に告白することで喜びの言葉に代えたいと思います。冷戦が終盤に近づき、湾岸戦争が始まったころ、わたしは中学一年生でした。中ソ関係史研究がそのころ大きく飛躍したことを考えますと、わたしがその勉強を始めるまでに20年近くの開きがあります。ひとが誕生して成人するまでの「20年」、この時間の壁はなかなか乗り越えられるものではありません。子供が大人に教えを請い、それに立ち向かおうとする所作をプロフェッショナルと呼べば、その名を汚すことになるだろうと悩みました。ロシア語を独学で学ぶという不作法によって、その悩みはますます深いものになりました。

ただ、あるとき名優柄本明が職業はひとを狂わせる、自身の職業にはコンプレックスをもつべきで、アマチュア精神こそ大切にすべきだと話しているのを知りました。思えば、故人である永井陽之助教授も軍国主義日本の悲劇は専門家が自らの仕事を過信するところから生まれたと批判していました。ときにプロを自称する研究者であっても、新しい資料や枠組、自身に都合のよい情報に夢中になるあまり、近視眼的で自分勝手な分析に陥らないともかぎりません。ひとによる作為を嫌い、自然思想を愛した老子のことは「手にはいりにくい珍品は、人の行動を誤らせる」（金谷治『老子』講談社）は、プロを自称する研究者であっても、功をあせるときには自戒の句とすべきものなのかもしれません。プロの一群が通り抜けた道には、もはや目ぼしいものが落ちていないとみるのが通例。ただ、人間社会の営みをまえにしたとき、その複雑さに戸惑い、すべてを理解することが難しいと痛感することでは、プロもアマも選ぶところがないのではないか。「しろうとの思いつきは、普通、専門家のそれにくらべて優るとも劣らぬことが多い」（M. ウェーバー [尾高邦雄訳]『職業としての学問』）のだとすれば、プロの一群が通り抜けた中ソ関係史の研究領域にも、アマチュアが拾い上げられる素材がまだ残されているのかもしれない。まずは自身の未熟さと向き合いながら、今回いただいた賞を糧にいつそ精進したいと思うばかりです。引き続きご指導賜れますよう、よろしくお願い申し上げます。